活　動　報　告

共同研究グループ活動報告（2021 年度）…… 284
講演会要旨…… 294
購入文献解題…… 296
所員自著紹介…… 302

共同研究グループ活動報告（2021 年度）

日中関係史

2021 年度もコロナ禍の影響で対面の研究会活動を再開することはできなかった。しかし，オンライン会議の導入を積極的に進み，東京と横浜以外の研究者との交流を積極的に図る機会になった。zoom 会議の例会記録はすべて http://chineseovers.jugem.jp/ に掲載している。また，2021 年度の予算で人文学研究所叢書の論文集を刊行すべく鋭意準備を進めている（第 86 回例会の記録を参照のこと）。以下，本年度に開催した研究会活動を箇条書きで記す。

⑴　第 83 回例会

◎日時：2021 年 4 月 24 日（土曜）

◎場所：zoom 会議

◎内容：「文化大革命初期の北京の外国人留学生 ── 『中共重要歴史文献資料匯編』所収資料に依拠して」（川島真，東京大学）

⑵　第 84 回例会

◎日時：2021 年 5 月 15 日（土曜）

◎場所：zoom 会議

◎内容：「汪精衛の日本留学と陽明学 ── その活動の背景」（関智英，津田塾大学）

⑶　第 85 回例会

◎日時：2021 年 6 月 5 日（土）

◎場所：zoom 会議

◎内容：「国立国会図書館蔵『上海新華書店コレクション』について」（中村元哉，東京大学）

⑷　第 86 回例会

◎日時：2021 年 7 月 30 日，31 日

◎場所：zoom 会議

◎内容：論文集の予備報告会

⑸　第 87 回例会

◎日時：2021 年 10 月 2 日（土）

◎場所：zoom 会議

◎内容：⑴　清国留学生の見た明治日本 ── 『鴻跡帖』を手がかりとして（孫倩，河南農業大学外国語学院講師）
　　⑵　北京警務学堂派遣の旗人留学生と愛国主義（張潔，広島大学博士課程）

⑹　第 88 回例会

◎日時：2021 年 11 月 6 日（土）

◎場所：zoom 会議

◎内容：⑴「日本と中国の同窓会の異同について」（佐藤量，立命館大学）
　　⑵「日本語教育から見た清国人日本留学生」（酒井順一郎，九州産業大学）

※来聴歓迎

⑺　第 89 回例会

◎日時：2021 年 12 月 18 日（土），4 時～6 時　東京時刻

◎内容：⑴「中国人留学生と日本の服装文化」劉玲芳（大阪大学招聘研究員）

（文責　孫安石）

色彩と文化Ⅳ

本研究は，2020～2022 年度の学内共同研究奨励助成金を獲得し，「多文化共生社会の言語景観 ── 観光立国日本の多言語表示と情報発信を再考する ──」という研究課題（代表者：鈴木幸子，メンバー 9 人）のもと，「言語景観」に焦点を当てた活動を展開している。2021 年度もコロナ禍の影響を受け，本研究に不可欠な実地調査は十分にはできなかったが，可能な範囲で最善を尽くした。その一方で，2020 年度からひきつづき，研究メンバー間で定期的にオンライン研究会を開催して，情報の共有をはかり討議を重ねた。

⑴　研究会の開催

第 1 回研究会

開催日：4 月 28 日（金）20：00～23：00

会　場：Zoom

発表者：尹亭仁（本学国際日本学部教員）

テーマ：最新の言語景観および観光関連の参考文献の紹介

第 2 回研究会

開催日：6 月 23 日（水）20：00～23：00

会　場：Zoom

発表者：佐藤梓（本学経営学部教員）

テーマ：「やさしい日本語とは何か」

第 3 回研究会

開催日：7 月 30 日（金）17：00～20：00

会　場：Zoom

発表者：鈴木幸子（本学国際日本学部教員）

テーマ：「SDGs と観光」

第 4 回研究会

開催日：9 月 30 日（木）17：00～20：00

会　場：Zoom

発表者：鈴木慶夏（本学外国語学部教員）

テーマ：「中国語言語景観からみた表現形式の適切性と情報発信の有効性」

第 5 回研究会

開催日：10 月 29 日（金）17：00～20：00

会　場：Zoom

発表者：由川美音（本学外国語学部教員）

テーマ：「観光情報資料に見る多言語化の特徴について」

第 6 回研究会

開催日：12 月 27 日（月）17：00～20：00

会　場：Zoom

発表者：高木南欧子（本学国際日本学部教員）

テーマ：「留学生を取り巻く言語景観 ── キャンパスを中心に ──」

第 7 回研究会

開催日：1 月 28 日（金）17：00～20：00

会　場：Zoom

発表者：尹亭仁（本学国際日本学部教員）

テーマ：日本における韓国語の言語景観と活用の可能性の模索
── 韓国語の文法理解の向上の観点から ──

第 8 回研究会

開催日：2 月 25 日（金）17：00～20：00

会　場：Zoom

発表者：李忠均（本学国際日本学部教員）

テーマ：「京都における言語景観 ── 韓国語を中心に」

第 9 回研究会

日　時：3 月 18 日（金）17：00～20：00

会　場：Zoom

発表者 1：鈴木幸子（本学国際日本学部教員）・尹亭仁（本学国際日本学部教員）・
由川美音（本学外国語学部教員）

テーマ 1：「神戸・南京町と長崎・新地中華街における言語景観と多文化共生の現状
── 横浜中華街との比較を中心に」

発表者 2：尹亭仁（本学国際日本学部教員）

テーマ 2：「熊本市・鹿児島市・宮崎市における言語景観と取組みの特徴」

第 10 回研究会

日　時：3 月 28 日（月）17：00～20：00

発表者：小林潔（本学国際日本学部教員）

テーマ：「国内観光地のロシア語使用について」

⑵　海外調査

なし

⑶　国内調査

- 鈴木慶夏：2021 年 9 月 3 日（金）～9 月 10 日（金）
  ［北海道 6 空港と道東観光地の言語景観調査］
- 尹亭仁：2021 年 12 月 2 日（木）～12 月 4 日（土）
  ［新潟市の言語景観調査］

- 李忠均：2022 年 1 月 29 日（土）～1 月 31 日（月）
  ［京都の言語景観調査］
- 鈴木幸子・尹亭仁・由川美音：2022 年 2 月 21 日（月）～22 日（火）
  ［神戸市および南京町の言語景観と多文化共生の調査］
- 尹亭仁：2022 年 3 月 6 日（日）～3 月 9 日（水）
  ［熊本市・鹿児島市・宮崎市の言語景観の調査］
- 鈴木幸子・尹亭仁・由川美音：2022 年 3 月 14 日（月）～16 日（水）
  ［長崎市および長崎新地中華街の言語景観と多文化共生の調査］
- 小林潔：2022 年 3 月 23 日（水）～3 月 25 日（金）
  ［長野県妻籠における観光・宿泊施設の言語景観調査］
- 李忠均：2022 年 3 月 25 日（金）～3 月 28 日（月）
  ［京都市内・琵琶湖周辺の言語景観調査］

(4) 講演会の開催

第 1 回講演会

日　時：5 月 26 日（水）17：10～19：00
会　場：Zoom
演　題：「バルセロナの独自性にみられる言語景観」
講演者：堤明子氏（本学卒業生，スペイン・カタルーニャ州公認ガイド）

第 2 回講演会

日　時：8 月 27 日（水）17：10～19：00
会　場：Zoom
演　題：「コロナとこれからの観光」
講演者：鈴木彩氏（福岡県観光連盟誘致部係長）

第 3 回講演会

日　時：11 月 27 日（土）9：00～11：00
会　場：Zoom
演　題：「アメリカ第三の都市シカゴにおける多文化共生と言語景観」
講演者：齋藤葵氏（本学卒業生，アメリカ・ノースウェスタン大学博士課程）

第 4 回講演会

日　時：3 月 12 日（土）14：00～16：00
会　場：Zoom
演　題：「言語政策・観光政策から考える言語景観」
講演者：藤井久美子氏（宮崎大学多言語多文化教育研究センター教授）

(5) 研究成果

鈴木幸子：Commodification of Culture and its value as a tourist resource: Drawing from the linguistic landscape of Yokohama Chinatown『人文研究所報』67 号

(6) 著作権関係の情報収集

本研究課題は，現地調査の過程で撮影した写真の使用が欠かせないため，今後の研究発表，とくに刊行物での発表において著作権関係の問題が生じる可能性を見極める必要がある。現在は，当該分野に精通する専門家からのアドバイスを受けるべく，検討・相談の場を設ける計画を進めている。

本研究課題の遂行には国内外での実地調査が必要不可欠である。新型コロナウィルスの感染状況等に

注意しながら，2022 年度も実行可能なことを中心に研究活動を進展させる予定である。

（文責　鈴木慶夏）

言語変異研究

1. 今年度の主な研究内容：
   今年度は主に歴史対照言語学に関する資料調査と，中国語の「国語」の成立と 9〜13 世紀における中国大陸の多言語接触に関する研究，執筆活動を行った。
2. 今年度の主な研究成果：
   「中国語標準化の実態と政策の史話 ── システム最適化の時代要請」の論文執筆完成（『言語の標準化を考える』大修館書店 2022 年 3 月出版予定，校正中）
3. 今年度購入された主な研究所所蔵資料：
   『鄭玄論叢』
   『老子異文化総彙』
   『魔天与摩登：近代上海摩天楼研究 1893–1937』
   『敦煌漢文本大智度論整理与研究』
   『孫可之文集校注』
   『毛傳鄭箋補正』
   『中国年度小小説（2020）』
4. 2022 年度は引き続き歴史社会言語学，歴史対照言語学に関する研究調査を実施する予定である。

（彭　国躍）

〈身体〉とジェンダー

1. 講演会・研究会の開催
   - 第 1 回研究会
     開催日：2022 年 1 月 31 日（月）
     会　場：オンライン
     発表者（所属）：角山朋子（国際日本学部・国際文化交流学科）
     「ウィーン工房の女性たち：ウィーンの近代デザインと女性の関わり」
     新メンバーに自身の研究を簡単に紹介してもらった。ウィーン工房での女性デザイナーの活動などが紹介されたが，学校・工房という制度やジャンル，素材・媒体に潜むジェンダーも浮き彫りになった。
   - 第 2 回研究会
     開催日：2022 年 2 月 18 日（金）
     会　場：オンライン
     発表者（所属）：熊谷謙介（国際日本学部・国際文化交流学科）
     「「動物，種，ジェンダーの表象を考える」とは？」
     2020 年に出版した『男性性を可視化する ── 〈男らしさ〉の表象分析』に続く叢書のテーマを検討し，それに沿った研究計画をたてた。
2. シンポジウムの開催　なし
3. 活動内容

〈身体〉とジェンダー研究会は『男性性を可視化する ── 〈男らしさ〉の表象分析』を 2019 年度に出版したが，その後に続く企画として，2020 年度から「種」や「動物」とジェンダーの関わりをテーマにした叢書の出版を目指して，学内・学外から多くの新メンバーを集め研究会を組織している。第 1 回研究会では，まず角山朋子氏が専門のデザイン史について，ジェンダーとの関連で発表を行った。20 世紀初頭，ウィーン工房には女性デザイナーが多く活動を行ってきたが，その意義が，当時の社会状況や隣接する芸術運動との関連から論じられた。本研究グループの身体とジェンダーという問題に直結するテーマで，デザインや素材というトピックの重要性が浮かび上がった。第 2 回研究会では，熊谷謙介が昨今のマルチスピーシーズ人類学の見地や，従来の人間と動物の関係性を問う文化研究の知見を紹介し，動物とジェンダーの絡み合いを探る作品分析の例も見ることで，動物・ジェンダー表象研究に取り掛かる上での枠組みが紹介された。

（文責　熊谷謙介）

自然観の東西比較

1. 研究会の開催
   開催日：1 月 31 日（月）15：00～
   会　場：Zoom
   発表者：伊坂青司先生
   演　題：「神仏習合の歴史と現在 ── 自然信仰の視点から」
2. シンポジウム
   開催せず。
3. 活動内容

今年度も，新型コロナの影響もあり，予定通りの研究会を開くことが出来なかったが，年度末に 1 回開催することが出来た。

（文責　上原雅文）

ヒト身体の文化的起源

活動報告：

① 人間の身体を系統的に渉り，その根源を考察することで，身体が持つ機能的な意義を検討した。

Ⅰ．アキレス腱の屈曲点の位置と増幅効果との関係性を調べた論文「Biomechanical gain in joint excursion from the curvature of the Achilles tendon: role of the geometrical arrangement of inflection point, center of rotation, and calcaneus」が Diagnostics 誌に掲載された。

（文責　衣笠竜太）

日中韓対照言語研究

本研究会は，2020 年度からすそ野を広げ，中国語を加えた形で本格的に「日中韓対照言語研究」をすすめることにした。しかし，昨今の状況により，本年度は積極的に取り組むことができなかった。

研究会の開催

⑴ 日　時：2021 年 6 月 30 日（水）17：00～19：00
　場　所：Zoom

発表者：山田　昌裕（本学　国際日本学部日本文化学科教員）
テーマ：格非標示名詞句の格
（2）日　時：2022 年 1 月 27 日（木）17：00～19：00
場　所：Zoom
発表者：高木　南欧子（本学　国際日本学部国際文化交流学科教員）
テーマ：日本語の誤用分析 ── 自然発話と作文における差異 ──
（3）日　時：2022 年 3 月 29 日（火）17：00～19：00
場　所：Zoom
発表者：尹　亭仁（本学　国際日本学部国際文化交流学科教員）
テーマ：日本語を母語とする韓国語学習者の作文にみる母語干渉の諸相

年 2 回以上の研究会の開催を計画し，活性化を試みている。対照言語研究の観点から日中韓以外の言語の研究者にも参加を呼びかけている。メンバーによる発表に加え，海外の研究者にも参加と発表の機会を提供していきたい。

（文責　尹亭仁）

各国近代文学の研究

1. 講演会・研究会の開催
第 1 回研究会
開催日：2022 年 1 月 22 日
会　場：ZOOM 開催
講演者：長澤唯史氏（椙山女学園大学）
演　題：SF とロックの文化的マトリックス ── ポストモダニズム再評価を手掛かりに
2. 活動内容

本研究グループは，活動 6 年目である。研究対象の時期的な重なりを基軸に据えながらも，研究をめぐる方法や環境・場の異なりについて相互に意識し，意見交換をしながら，領域横断的な近代文学研究の方向性を模索していく。講演会による講師のレクチャーから多くの刺激を得ることはもとより，さまざまな専門領域，方法論を携えたメンバーによる，それぞれの立場から質疑・意見交換を行い，お互いの知見を深めた。

（文責　松本和也）

知覚認知システムの普遍性と多様性

講演会・研究会の開催：なし
シンポジウムの開催：1 回
The 2nd Symposium on Perception and Cognition Systems for Nature of Plausibility
Date and time: Friday, 26 November 2021, 17:00–20:00 (JST), 9:00–12:00 (GMT)
Venue: Zoom
Language: English
Speaker
- Ute Leonards (University of Bristol)
- Nick E. Scott-Samuel (University of Bristol)

- Goro Maehara（Kanagawa University）
- Tatsuya Yoshizawa（Kanagawa University）

Abstracts

1. When vision leads the body astray

   Ute Leonards（University of Bristol）

   Twenty years ago, vision scientists Goodale and Humphrey stressed that "vision evolved in animals, not to enable them to 'see' the world, but to guide their movements through it"（Goodale & Humphrey, 1998, p. 183）. Yet, apart from research into obstacle avoidance and optic flow, even today there is little crosstalk between visual cognition and locomotion research, preventing us from understanding the role of visual information processing for real world behaviour. Here, I present work from my lab that reveals how the visual environment affects our gait, often in unexpected ways, even when we walk in obstacle-free environments on even ground. Experiments show how the validity of space perception is affected by floor patterns, impacting basic gait kinematics, foot placement, our ability to walk straight, and even overall walking confidence.

2. Effects of context on appearance：insights from camouflage

   Nick E. Scott-Samuel（University of Bristol）

   I will report some recent findings from my lab about various aspects of camouflage：translucency, dynamic background matching, distance dependent effects, and image complexity. I will argue that these offer useful generalisable lessons for perception.

3. An implausible impression of stereogram could be due to perceptual enhancement of luminance modulation.

Goro Maehara（Kanagawa University）

Although stereograms provide a sensation of depth, they often look artificial and somewhat unplausible. This could be partially due to their appearance of luminance contrast. Previous studies have shown that binocular summation in contrast detection thresholds went down to the level of probability summation as binocular disparity increased. However, little is known about the effect of binocular disparity on the appearance of luminance contrast patterns above threshold. To address this issue, we measured the luminance contrast of stereoscopic stimuli at the perceptual match to a certain fixed contrast owned by reference stimuli with zero binocular disparity. The matched contrast of the in-phase stimulus, which had luminance modulations in the same phase between eyes, was veridical at 0 degrees of binocular disparity and decreased as the disparity deviated from 0 degrees. On the other hand, there was no significant difference between the monocular matching contrast at 0 degrees and 0.5 degrees eccentricity, indicating that the reduction in matched contrast requires a stereoscopic presentation. These results suggest that suprathreshold stimuli with binocular disparity appears having higher luminance contrast than stimuli with zero disparity.

4. Luminance and chromatic information to produce visual plausibility in the material perception.

   Tatsuya Yoshizawa（Kanagawa University）

   What visual cue produces the visual plausibility of an object is an essential psychological question. Last decade, it was argued that statistical luminance information had a prominent role in perceiving texture in recognising an object's surface. We have explored how luminance and chromatic information contribute to the object perception, regarding local and global spatial structures and statistical property. We found that local luminance structure was crucially important information to perceive material surface. We also

showed that chromatic information provided rich information to identify a particular object among objects within the identical category. This indicates that luminance and chromatic information has different function to produce visual plausibility in the material perception.

活動内容：

本研究グループは，人の知覚・認知の仕組みについて，研究することを目標としており，特に，知覚的様相や認知的様相に共通な普遍性とそれらの様相の相互効果によって展開した多様性を現象・行動観察や計算論的解析などを通して明らかにする活動を行うために共同で取り組んでいる。

本年度も，新型コロナウィルス感染防止の観点から，研究交流が十分できなかったが，一昨年度開催したシンポジウムを遠隔で行い，英国研究者2名と本グループメンバー2名に講演いただき，その後討論を行い理解を深めた。報告時点では1回のシンポジウムであるが，2月に2回目のシンポジウムが予定されている。

2021/01/12

報告者：吉澤達也

学びの見える化

⑴　研究会の趣旨

各研究テーマに応じた専門職の人材育成の見える化を行い，教育・学習のあり方や体系化を検討する。各自のテーマを持ち寄り，研究報告及び意見交換を行う。

⑵　テーマとメンバー

「ボランティア評価に関する研究」「アクティヴ・エイジングに関する研究」

齊藤ゆか（神奈川大学人間科学部・教授）

「技術・技術指導の理論と実際」

森和夫（神奈川大学人文学会研究員，株式会社 技術・技能教育研究所）

「社会化と個人化の一体的支援」「個人完結型から社会開放型への転換」

「原点回帰としての癒しの評価」西村美東士（若者文化研究所代表，聖徳大学非常勤講師）

森小夜子（トヨタ自動車）

「社内における人事管理と育成」

下津祥子（医療法人聖心会かごしま高岡病院）

「看護師の育成 ── CUDBAS 手法の活用」

大瀬恵子（一宮研伸大学看護学部）ほか

「女性の健康生活支援看護助産に関する研究」

⑶　研究成果

森和夫（2021）『技術・技能指導の理論と実際』職業教育開発協会　ほか

⑷　研究実施日

月2回，土曜日9時～14時ごろ　全20回（ZOOM にて）

4月10日・24，5月8日・22日，6月5日・19日，7月3日・17日，9月4日・18日，10月9日・23日，11月6日・20日，12月4日・18日，1月8日・22日，2月5日・19日

（文責　齊藤ゆか）

芸術（アート）と物語の交雑／発信力

1. 講演会・研究会の開催
　第 1 回研究会
　開催日：2022 年 2 月 18 日
　会　場：ZOOM 開催
　講演者：伏木啓氏（名古屋学芸大学／演出家・映像作家）
　演　題：伏木啓作品の表現の射程

活動内容

本研究グループは，2020 年秋に結成したもので，今年度は 2 年目となる。今年度中の活動としては，各自が研究会テーマに即した活動をそれぞれ進めつつ，問題関心をすりあわせていった。なお，全体の活動としては，上記講演会を催し，さまざまな要素が交錯する芸術（アート）について，研究を深めて行く予定である。

（文責　松本和也）

おとぎ話文化研究

今年度はメンバー各自がおとぎ話文化に関する研究調査と研究成果の公表に向けた準備を進め，メンバー間で互いの研究内容についての批評や助言をメールと Zoom により継続的に行った。来年度は国内外の学術誌および出版社からメンバー各位の研究成果の刊行が予定されており，刊行後に互いの研究成果に対する批評を交換する研究会を開催する。

代表者の本共同研究グループの研究課題に関する研究成果の一つとして，本共同研究グループのメンバーによるこれまでの出版物を含む以下の図書展を，本学図書館の蔵書から選書して開催した。

展示タイトル：Fairy Tales and Visual Culture おとぎ話と視覚文化
日時：2022 年 1 月 7 日（金）～3 月下旬
場所：神奈川大学みなとみらいキャンパス図書館 2F 展示スペース

（文責：村井まや子）